

1840年の *Morning Chronicle* の四つの記事とオーヴァストーン

* 竹 内 洋

Four articles in *Morning Chronicle*, 1840 and Overstone

TAKEUCHI Hiroshi

Abstract

In autumn 1840, after the resignation of Overstone from the place of his evidence before the 1840 Commons' Committee on Banks of Issue, there have been four articles in *Morning Chronicle*, which were on the discussion in the committee and were considered as have been written by Overstone himself to complete his uncompleted discussion in the committee. It is not sure if even one of them was written by himself, but it was sure that they were all on his side and against Hume and Tooke and tried to secure his Currency Principle.

Key words : Currency Principle, Overstone, Samuel Jones Loyd, *Morning Chronicle*

I. 問題

19世紀前半イギリスの通貨論争における通貨主義 (Currency Principle) は一般にオーヴァストーン卿 (Overstone, Lord, 1796-1883. 1849年までは Samuel Jones Loyd であったが、以下においては基本的にオーヴァストーン (Overstone) と記す)、ノーマン (Norman, George Warde, 1793-1882) およびトレンズ (Torrens, Robert, 1780-1864) の三人をその代表者とするが、実際には、通貨の規定をめぐる、前二者と後二者との間に大きな食い違いがあった。既に見たように、後二者のトレンズは通貨の把握においてはその中に預金も含まれるとするヒューム (Hume, Joseph, 1777-1855) のそれに従っていたが、その通貨観をオーヴァストーンは他ならぬ銀行学派のトゥック (Tooke, Thomas, 1774-1858) を利するものとして激しい調子で否定したのであった (拙稿2014)。

そのオーヴァストーンは1840年の銀行委員会 (The Select Committee appointed to inquire into the

effects produced on the Circulation of the Country by the various Banking Establishments issuing Notes payable on demand) において当のヒュームと直接に対決することになったが、それはオーヴァストーンがヒュームの執拗な問いに耐えかねてか委員会を途中退席したことによって、そしてその席に二度と戻ってこなかったことによって、終わってしまったのであった (拙稿2016)。

この結末に対して、ヒュームは自ら凱歌をあげ、それは後々までの語り草にさえされたのであったが (同上拙稿)、その一方で、オーヴァストーンは同年秋、同委員会が終了して報告書が公刊された直後の9月～11月に *Morning Chronicle* 紙に四つの記事を寄稿し、それらをもって同委員会証言を補足しようとしたとされる (O'Brien, D. P., 1970, Vol. I, p. 26.)。それらは、具体的には、同紙の第22,093号 (1840年9月16日水曜日)、第22,108号 (同年10月3日土曜日)、第22,123号 (同10月21日水曜日) および第22,140号 (同11月10日火曜日) の各号 (*Morning Chronicle*, 1840a, b, c, d) に掲載

* 宮城教育大学社会科教育講座

されたものであった。ただし、それらのどれにもオーヴァストーン（当時はLoyd）の署名はなかったこと、そして、それらの記事の中ではオーヴァストーンは「ロイド氏（Mr. Loyd）」と記されていることは、それらがオーヴァストーン自身の手になるものとする見方に対して安易に首肯するのを躊躇させるものであろう。これらの疑念に対しては、これらはオーヴァストーンが自らが執筆した新聞記事を保存していた一連の切り抜き帳に含まれており、その第一冊に‘By Myself’と書かれていることを根拠に、オブライエンがそれらはすべてオーヴァストーン自身の手になるものとしているのも周知のことがらであろう（O'Brien, *Ibid.*）。

四つの記事が果たして未完に終わった委員会証言のオーヴァストーン自身の手になる補足であったか否かについてはこれ以上の判断材料がなく、したがって何れについても確証はないように見える。だが、その一方、それらは、もしそれらがオーヴァストーン自身の手になるものでなかったとしても、その内容から見て、オーヴァストーンの主張を補足したものであるとすることはできるように見えるのである。

小稿は、このような *Morning Chronicle* 紙の四つの記事の内容により、未完に終わったオーヴァストーンの委員会証言を完結させ、そのことを通じてオーヴァストーンの通貨主義の解明の一助にしようとするものである。

II. 四つの記事の概要と論点

(a)オーヴァストーンの委員会証言概要

そこで、まず、オーヴァストーンの委員会証言をヒュームとの対立点に即して回顧してみると、そこでの主要な論点は当初から預金は通貨であるかという点であった（拙稿2016）。具体的には、預金も通貨であると見なすヒュームに対して、まずヒュームとの直接対決の前半すなわち同年7月23日および24日の証言について見ると、それは「通貨の使用を節約する方法の一つ」（7月23日、証言第3109号）であり、「一定の条件のもとで一定の債務を解消するために使用され得る」（7月24日、証言第3181号）のものである一方、「貨幣が持っている無限の連鎖における普遍の交換可能性を持たない」（同日、証言第3192号）のものであり、銀行券は現実存在する貨幣であるのに対して預金はそ

の銀行券に対する請求権としてしか存在しない（同日、証言第3237、3238号、および拙稿2016、16頁。）というものであった。ヒュームとの直接対決の後半であり、最終の場面であった7月31日には、これらの問題が、イングランド銀行による有価証券や金の買い入れにおける預金の働きをめぐる争われた。問題は、具体的には、イングランド銀行によるそれらの買い入れは通貨流通高をその分だけ増加させるかということであった。それに対するオーヴァストーンの回答は、通貨とは発行されてイングランド銀行の内外に存在する銀行券のことであるから（7月31日、同委員会証言第3481号）、それがイングランド銀行から払い出されて同行の壁の外側に流出したとしても、そのこと自体は通貨流通高の増大を意味しないということ、したがって、イングランド銀行の有価証券保有高の増減は通貨流通高の増減の指標とはならないこと（同第3471号）、以上であったが、しかし、それらの買い入れに預金が用いられ得ることについては、西インド借款にかかわる起債をめぐる議論においてこれを認めるに至り（同第3526号）、ここに通貨と預金との問題について、ヒュームに対して凱歌をあげさせる余地を残したのであった。

(b)四つの記事の概要と論点

Morning Chronicle の四つの記事がこれらの諸問題の解決を意図したのか否かについての確証はない。また、そもそもそれらがオーヴァストーンの手になるものという確証もないのであるが、それらが、そのすべてがではないが、その記事冒頭に‘Parliamentary Inquiry into Banks of Issue’の表題を掲げていることから、それらが同年の銀行委員会証言を念頭に置いたものであることは間違いないだろう。そこで、次に、上記諸論点にかかわる限りで、四つの記事の内容に即して、何がどのように補足されたかを見ることにしよう。

四つの記事には、その第一である第22,093号のそれを除き、何れにも‘Parliamentary Inquiry into Banks of Issue’の表題が掲げられている。また、同号の分も、それは‘MORNING CHRONICLE’の表題のもとに置かれたいくつかの記事の一つであったが、その冒頭に、発券銀行に関する委員会報告が証言および諸資料とともに印刷刊行されて入手可能になったとの記述がある

ことから、同記事もまた他の三つと同じ主題であること、そしてそれは他の三つと合わせた四つの記事の一番目を成すものであること、これらのことがわかる。つまり、四つの記事は9月16日水曜日の記事に始まる一連のものだということである。なお、それらの執筆がオーヴァストーンの手になるものであるか否かについての確証がないことについては、オーヴァストーンが「ロイド氏」として言及されていることを含めて、すでに触れた。

四つの記事の内容であるが、まずその第一である第22,093号 (*Morning Chronicle*, 1840a) において、委員会証言の順序にしたがい、はじめに証言者たちの最初の五人とその証言の要点が簡単に紹介され、次にパーマーおよびノーマンの証言要点に進み、最後にオーヴァストーンとトゥックのそれが紹介されている。その際の論点としては、委員会の設置目的からまずいわゆるパーマー原則の妥当性が取りあげられ (House of Commons, 1840, p. iii. 拙稿2016, 17頁¹⁾), それを始点に、第二に預金と通貨との関係の問題が取りあげられ、最後に第三に発券規制の原則の問題に至っている。同記事はこれら第二および第三の論点に紙幅全体の半分近くを費やしており (*Morning Chronicle*, 1840a, 2g-3a.)⁽¹⁾, その内容は後に見るようにオーヴァストーンの主張の再現あるいは補足と言うべきものであった。

第二の記事は、第一のその17日後、10月3日土曜日刊の第22,108号 (*Morning Chronicle*, 1840b) に掲載された。それには、上にも述べたように、'Parliamentary Inquiry into Banks of Issue' の表題が掲げられていた。そして、その冒頭において、あたかも先の委員会におけるヒュームの態度への憤懣を表わすかのように、およそ論争を成功裡に導くための注意事項を並べ立てたうえで (*Ibid.*, 3e), その委員会におけるオーヴァストーンの主張を再現し補足する内容となっている。その中心論点は、貨幣とは何かということ、あるいは通貨 (circulation) を構成するものは何かということであり、その点でオーヴァストーンの委員会証言に重なるものとなっている。

第三の記事は、そのさらに18日後、10月21日水曜日刊の第22,123号 (*Morning Chronicle*, 1840c) に掲載され、

前号と同じ表題が掲げられている。論点は前号で一応規定された貨幣または通貨の意義は何かということ、そしてその調節の方法はどのようなべきかということであり、そこでもまたオーヴァストーンの主張が展開される。

第四の記事 (*Morning Chronicle*, 1840d) は以上を承け、そこでの主張を実証的に裏づけようとしたものである。以上から、四つの記事は、はじめに委員会証言の概観から貨幣または通貨とは何かという点とそのあるべき規制はどのようなものかという点との二つを論点として取り出し、続く三つの記事においてそれらの論点について考察を加え、最後に自説を実証的に裏づけようとしたものであることがわかるだろう。それは、そのような手順で、1840年銀行委員会におけるオーヴァストーンの未完の証言を補完し、正当化しようとしたものであるように見える。そこで、次に、これらの諸論点に即して、その内容を今少し詳しく検討してみることにしよう。

Ⅲ. 四つの記事の内容

(a) 委員会証言の概要と論点の整理

——*Morning Chronicle* 第22,093号——

四つの記事の第一は1840年9月16日水曜日刊の *Morning Chronicle* 第22,093号第2～3面に掲載された (*Morning Chronicle*, 1840a, 2e-3a.)。その内容構成は上に見たとおりである。

同記事ははじめに最初の五人の証人について簡単に紹介している。それらは何れもマンチェスター商業会議所 (Manchester Chamber of Commerce) を代表する J. B. スミス (John Benjamin Smith) とコブデン (Richard Cobden), ウッド (William Rayner Wood), いわゆるパーミンガム派を代表するマンツ (George Frederick Muntz) および通貨に関する多くの記事で当時有名だったページ (Richard Page) であったが (*Morning Chronicle*, 1840a, 2e-f.), これらの証人たちが立場を異にしながらも何れもイングランド銀行の通貨政策に批判的であったからであろう。委員会は彼らに続いて同行の二人の代表者、ノーマン (George

(1) ここで '2g' および '3a' というのは同紙の「第2面の第7番目のコラム」および「第3面の第1番目のコラム」の意味である。'a, b, c...' が「1, 2, 3...' の各数字を表わす。文献一覧を含む他の場所でも同じである。

Warde Norman) とパーマー (John Horsley Palmer) を喚問した。

その際、問題はいわゆるパーマー原則の妥当性に関するものであったが、記事は同原則の妥当性をめぐるパーマーの主張を紹介しつつ、併せて、次のように、ノーマンの証言の要点を伝えている。

「金の流出に照応させた通貨 (circulation) の収縮こそは紙券貨幣がそれによって規制されなければならない最高位の原理なのだ、と彼は考えたのである。」(Morning Chronicle, 1840a, 2f.)

ノーマンのこの主張はオーヴァーストーンのそれを代弁したのと言ってよいだろう⁽²⁾。この証言は、記事後半においてオーヴァーストーンの主張の概要を紹介することを主題とするための、言わば布石のようなものであったと思われる。

これを承け、最後にオーヴァーストーンとトゥックのそれぞれの主張の要点が示された。オーヴァーストーンのそれは周知のものである。まずその通貨原理が次のように要約される、すなわち、第一に紙券貨幣は金属貨幣の代用物であり、その前者は後者と同量に保たれることによって後者と同価値に維持されること、第二に金属貨幣流通量の増減の指標は金の流入出であり、それにしたがって紙券貨幣も増減されるべきこと、第三に紙券貨幣とはすべての一覽払いの支払約束のことであり、イングランド銀行の預金は一国の貨幣を構成しないこと、以上である。そして、そのうえで、1825、1837および1839の各年における通貨政策についてはこれを地金減少に照応させて通貨を収縮すべき発券者がそれを怠った事例とする一方、1830～32年については適切な発券収縮によって金の流出が回避された事例としたとされる。(Ibid., 2f-g)

それに対してトゥックの証言の要点は、第一に通貨規制の目的は利子率の安定維持であること、第二にこの利子率の安定と金準備の増大とによって銀行券の兌換性は維持されること、第三に同じくそれにより貨幣価値は安定すること、以上とされたが、その分量はオーヴァーストーンのその半分にも満たない分量であり、その限りではやや簡単なものとなっていると言え

よう。(Ibid., 2g)

以上の概観のうえに、記事は三つの論点を提示する。第一は委員会の調査問題でもあったパーマー原則の有効性についてであるが、それについては、「預金業務が発券業務と一体とされているもとの」(Ibid., 2g) との限定のもとで、パーマーとページがこれを妥当とし、それに対してノーマンとオーヴァーストーンとが、それは預金業務の管理に対して適用不可であることをもって、否定的な立場だったとしている。そして、このことから第二に預金は国の通貨流通高または貨幣の一部かということが論点とされ、ここにそれに対して肯定的な側としてページ、スミスおよびコブデンの三人と並んでヒュームが引き合いに出され、そこには次の語が見られた、すなわち「同じ見解が委員会においてヒュームによって強力に支持された」(Ibid., 2g)、とである。

この対立を承け、第三に発券規制の原理は何かという問題が提起される。そして、この問題をめぐり、一国の総紙券通貨流通高は総金属貨幣流通高によって規制されるべきこと、金の流出入が金属貨幣の変動の指標であること、およびそれが紙券発行の総額がそれによって規制されるべき規準 (test) であること、の三点があらためて掲げられ、その重要性とともに、それは「紙券発券に関するこの原理の最高権威を保っている人々によって明確に主張されている」(Ibid., 2g-3a) とするのであるが、この「最高権威」の一人がオーヴァーストーンであることは明らかであろう。この記事は、以上の概観から見る限りでは、ヒュームとオーヴァーストーンとの対立を軸に組み立てられていると言えるだろう。

(b) ヒュームとの対決の総括

— Morning Chronicle 第22,108号 —

四つの記事の第二は1840年10月3日土曜日刊のMorning Chronicle 第22,108号 第3面に掲載された(Morning Chronicle, 1840b, 3e-g)。

問題は一覽払いの銀行券の発券が通貨流通高 (circulation) に及ぼす影響はどのようなものかということであった。そして、この問題に関わって通貨を構成するものは何かということが問題になったのであ

(2) オーヴァーストーンとノーマンとが密接な関係にあったことについては拙稿 (2013) も参照。

た。問題の背景は次のように整理されている。

「イングランド銀行においては要求払い銀行券の発券業務が一般業務と混ぜ合わされており、銀行券が商業目的でも預金者の支払い目的でも発行され、銀行券の量はこれら両方の原因にもとづく需要によってしばしば決定され、通貨流通高の勘定は預金および銀行業務のそれと大きな範囲で一体化されてしまうのである。」

(*Morning Chronicle*, 1840b, 3e.)

そして、このことから、貨幣あるいは通貨 (circulation) とは何かをめぐって大きく分けるならば三つのグループが登場することになったのである。その第一のグループはそれは鑄造貨幣およびそれを一覧払いする約束手形のことだとし、第二のグループはそれに為替手形と発券銀行の預金を加え、第三のグループは第二のそれから為替手形を除外する。記事は、この混乱を解消するために、まず紙券貨幣が導入されるに至った事情の回顧に進み、それは金属貨幣の代替物であったとしたうえで、この貨幣と為替手形および預金との性格の比較に移っていく。

これらの前者である為替手形については、ヘリーズ (Herries) および J. A. スミス (John Abel Smith) の質問に対する J. B. スミスの回答を紹介している。委員会における実際の質問は次のとおりであった。

「諸負債の大部分は為替手形という手段によって支払われるのではないのか」(質問第75号)「マンチェスターにおいて為替手形が交換用具として使用される場合、それらは通貨 (currency) の一部を形成するのではないのか。」(質問第572号)「リヴァプールにおいては綿花の大部分はマンチェスターの商人によっては為替手形によって支払われているのではないのか。」(質問第576号)

これらに対する J. B. スミスの回答についても、委員会報告書から質問第572号に対する回答の一部を引いておこう。

「否、私は通貨を貨幣たるべきものと定義したが、しかし、為替手形を貨幣と称することはできない。」

(証言第572号)

この質疑に対して、記事は次のように述べている。

「為替手形は、国の貨幣あるいは通貨流通 (circulation) に立脚する負債 (engagements) の極めて多様な諸形態の一つなのである。」

(*Morning Chronicle*, 1840b, 3f.)

預金についてはヒュームの次の質問が紹介されている。

「外国貿易に従事するすべての商人、すべての外国為替取扱業者および地金の輸出入業者は、主として、それのみによってではないとしても、イングランド銀行あるいは他の諸銀行の預金によって彼らの業務を行なっているのではないのか。」

(質問第3245号)

この問いの含意とそれに対するオーヴァストーンによる回答については前稿 (拙稿2016) で詳しく見たところであり、その要点は上に委員会の7月23日付証言第3109号と7月24日付証言第3181号を掲げておいたとおりである。

つまり、為替手形も預金も本来の貨幣ではないのであり、したがって通貨流通高 (circulation) を構成するものではない、ということである。ここに同記事の基調は委員会においてヒュームに対立したオーヴァストーンの主張と一致していると言うことができるだろう。こうして、この記事の最後に、預金は通貨であるという主張の検討がなされることになる。

それはその主張が含む七点の誤謬 (fallacies) を一つひとつ吟味することであり、それは次の諸点で間違いなのであった。すなわち、第一に預金を通じた支払いの実行は全預金者において同時には不可能であることを理解していない点で、第二に預金は政府勘定がそうであるように実際にはその用途があらかじめ定められていて全面的に預金者の自由になるものではない点で、第三に、預金は帳簿に預金残高として存在するものであり、しかもそれは貨幣以外の様々な諸手段を含んでいるにもかかわらず、それを銀行に支払われて銀行にとどまっている貨幣だと考えている点で、第四に

預金者は預金によって銀行券あるいは鑄貨の介在なしに支払うことができることをもって、そのことは価値尺度機能を含む貨幣の諸機能のうちの一つでしかなく、にもかかわらず、預金を銀行券あるいは鑄貨と同じだと見なしている点で、第五に貨幣の増減は信用取引への影響を通じて金の流入出を伴う預金の増減を惹き起こす傾向があるということを理由として、預金の増減は金の流入出をもたらすという反対のことが真であると考えている点で、第六に預金者は、実際にはその預金の全部に対する完全な支配権を行使できないにもかかわらず、その預金全額に対する支配権を持つと考えている点で、そして第七に預金は貨幣節約の方式(mode)なのであって貨幣そのものではないことを理解しない点で、である。

これらは委員会においてオーヴァストーンが主張したことを列挙したものと比べてよいだろう。同記事による委員会の証言経過の概要は以上である。そして、そのあとに次のコメントが付された。

「為替手形と預金が、あるいはその何れかが、国の貨幣を構成する要素と見なされるなら、通貨の管理はどのような効果的な規制にも服さないということに必然的になるだろう。」

(*Morning Chronicle*, 1840b, 3g.)

預金を貨幣あるいは通貨と見なすヒュームの立場は、オーヴァストーンにとっては、この点からも受け入れられないものであったということができるだろう。

(c) ヒュームとの対決からトゥックとのそれへ

— *Morning Chronicle* 第22,123号 —

四つの記事の第三は1840年10月21日水曜日刊の *Morning Chronicle* 第22,123号 第3面に掲載された (*Morning Chronicle*, 1840c, 3b-d.)。

記事は1840年委員会の証言全体を総括するかのよ

うな次の一文をもって始まっている。

「委員会でのこの主題についての証言の多くの部分において、我が国の貨幣あるいは通貨 (circulation)

は様々な形態における、とりわけ(中略)為替手形および預金の形態における信用の上部構築物 (superstructure) がそのうえに立脚している土台 (foundation) として言及された。」

(*Morning Chronicle*, 1840c, 3b.)

そして、それに次の一文が続いた。

「さて、通貨こそは(中略)我が国の信用制度がそれに立脚するとともに信用から発する諸取引の広がりやそれに依存する土台なのであり、…(中略)…、救済は預金や為替手形等々の規制すなわち上部構築物の単なる修理の中ではなく、信用という織物全体が立脚している基礎である紙券貨幣の総額を規制してその妥当な価値を維持することの中に見出されなければならないのである」 (*Ibid.*)

この紙券貨幣がこの一連の記事においてどのようなものとして把握されているかはすでに上記においても見た。その点について記事では当時刊行された Gallatin の「銀行と通貨に関する有名な小冊子」⁽³⁾ を引いている。それによって自説を補強しようとしたのであろう。ここに、この一連の記事に関する限り、預金と通貨との関係をめぐる問題はもはや解決済みのこととなり、それとともにヒュームもオーヴァストーンにとっての理論敵の位置から去って行くことになる。

そこで、残された問題について、記事は次のように述べている。

「一国の貨幣量が物価の一般的な変動幅と取引行為の範囲とをある規定の範囲の中に押し止める支配的条件なのであり、そこで紙券貨幣が金属貨幣に替わって発券される場合、その紙券貨幣の量を、それ自身を規制し管理することではなく、物価の状態と取引の需要とに依存させることは事態の本来の適正な秩序を転倒させるものである。」 (*Ibid.*)

ここにおいて、トゥックが新たな理論敵になっていることは明らかであろう。その主張はトゥックの委員会証言に基づいて次の五点として列挙されてい

(3) Gallatin は当時のアメリカの理論家で通貨と銀行制度に関する著作があった。Gallatin (1831) および同 (1841)。

る。すなわち、第一に対外金流出の圧力が存在するも
とではイングランド銀行は受動的であってはならない
こと（証言第3760号）、第二にイングランド銀行は通
貨流通高を念頭に置いて行動してはならないこと（同
第3753号）、第三に金流出を阻止するためにはイン
グランド銀行は有価証券を通じて利子率に作用を及ぼす
べきで通貨流通高に影響を及ぼそうとすべきではない
こと（同第3761号）、第四に利子率への作用は破壊的
（violent）なものであってはならないこと（同第3766
号）、そして第五に利子率の大きな変動を回避するた
めに大規模な金準備が必要だということ（同第3746
号）、以上である。

しかしながら、このようにトゥックとのあり得べき
争点を列挙しながら、記事ではそのいちいちについて
の検討は回避され、利子率と通貨流通高との関係につ
いてのみ、次のような指摘がなされた。

「だが、利子率に及ぼされる効果がそれに応じた通
貨流通高への効果を伴わないとしたら、通貨の減
価および金流出に対抗するというこの案によって
いったいどのような救済があり得るのか、我々には
理解できないのである。」（*Ibid.*, 3c）

そして、この問いかけの妥当性を裏づける事例とし
て、通貨状態が健全であった一方で利子率が大きく、
しかも互いに反対方向に、変動したパリとハンブルグ
のケースを挙げ（*Ibid.*, 3c）、それをもって上記のトゥ
ック説は、事実上、退けられるに至り、残るはオーヴァ
ストーン説の提示となったが、それについては今やす
でに述べられたことの反復であり、そのため次のよう
に要点のみ述べられたものと思われるのである。

「それ（オーヴァストーン案）は、預金の変動には
考慮を払うことなく、紙券貨幣と地金の変動との直
接かつ厳格な一致を要求するのである。」（*Ibid.*, 3d）

(d) 統計による検証

—— *Morning Chronicle* 第22,140号 ——

四つの記事の第四は1840年11月10日火曜日刊の
Morning Chronicle 第22,140号 第3面に掲載された
（*Morning Chronicle*, 1840d, 3d-f.）。

その課題は冒頭において次のように明示されてい

る。すなわち、発券者が無制限に存在しており、しか
も発券業務と銀行業務とが結合されていて、かつ発券
は手形割引による場合には、金属貨幣に比較して紙券
貨幣が過剰化する傾向となり、かつ紙券通貨の量の変
動は不健全な影響を被り、そして為替逆調のもとでの
紙券貨幣縮減の試みは、その際には割引需要がむしろ
増大することによって、失敗するということが示すこ
とである、とである（*Morning Chronicle*, 1840d,
3d）。

この課題達成のために、記事は1840年銀行委員会報
告の附録16を利用する。それが含んでいる1832～40
年のイングランド銀行勘定によって、1834～37年お
よび1838～39年に金流出のもとで割引業務がどのよ
うな効果をもたらしたかを検証することができるとい
うのである。（*Ibid.*）

表1は同記事が掲げた1834～37年のイングランド
銀行の地金保有高、預金残高、通貨流通高および有価
証券保有高に関する表をその表記の仕方に従いながら
多少整理して再現したものである。

表1 1834～37年のイングランド銀行勘定（単位ポンド）

	地金	通貨流通高
1834年2月4日	9,723,000	19,786,000
1837年2月7日	3,831,000	18,809,000
増減	▲ 5,892,000	▲ 917,000
	預金	有価証券保有高
1834年2月4日	13,635,000	25,900,000
1837年2月7日	10,478,000	28,860,000
増減	▲ 3,157,000	Δ 2,960,000

* 増減欄のΔは増加を、▲は減少を、それぞれ表わす。
（*Morning Chronicle*, 1840d, 3dの表による）

問題は1834年2月4日時点の保有高の実に3分の
2にも上る金が1837年2月7日までの期間のうちに流
出してしまったのは何故かということであった。それ
に対する答は同期間における通貨流通高および有価証
券保有高の推移のうちにあるという。すなわち、その
間に、金流出にともなう通貨流通高の減少は進んだも
の、その一方で還流した銀行券で有価証券を再び買
い入れるという操作を行なったことの結果としてその
保有高が増加し、そうして通貨流通高は金保有高の減
少に見合うほどの減少に至らなかったのだ、というこ
とである。（*Ibid.*, 3e）

記事のこの要約は、同時期における地金保有高の減

少幅に比較して有価証券保有高の増加幅が小さ過ぎることから見て、それが大雑把に過ぎることは否めない。実際、この記事においては他の諸事情も加えた考察がなされているのであるが⁽⁴⁾、しかし、この要約により、この記事の意図が通貨調節を通じて地金保有高に通貨流通高を一致させることの重要性を際立たせることにあったことはわかるだろう。

記事は1838～39年のケースについても考察を加えている。表2は記事において次に掲げられたイングランド銀行勘定を上記の表1と同様に再現したものである。この表の特徴は前の表が‘Securities, Public and Private’の数値を含んでいなかったのに対してそれを含んでいたこと、そしてそのことから‘Discount’の項目が付け加えられていることである。

この表に表われた数値についても、その意義は上記表1の数値のそれと同じであるが、それは最下段に‘Securities, Public and Private’と‘Discount’の項が付け加えられている点で上記と異なっている。そのことの意味は、有価証券保有高の増加分2,507,000ポンドと最下段の‘Securities, Public and Private’の減少分1,997,000ポンド（符合は正とする）との和である4,504,000ポンドが割引額‘Discount’の増加分4,504,000ポンドに一致していることに示されているということである。つまり、同期間に金保有高の約75パーセントもが失われていく中でなお割引による有価証券の買入れを、したがって銀行券の再発行を、実施し続けたことの誤りであることが、ここに示されるのだということである。そして、何故にそのようなことになるのかと言えば、金流出下の貨幣逼迫期においては割引需要が大となるからである。そのことにより、兌換によ

てイングランド銀行に還流した銀行券が再発行されて有価証券保有高の増大をもたらすのである。そのようなことが、正に金の流出が続いている局面において、すなわち通貨流通高を取縮させるべき局面において、継続的に発生し、そうして金の流出をさらに推し進めてしまうのである。(Ibid., 3e)

表2 1838～39年のイングランド銀行勘定(単位ポンド)

	地金	通貨流通高
1838年8月21日	9,520,000	19,573,000
1839年8月27日	2,420,000	17,982,000
増減	▲7,100,000	▲1,591,000
	預金	有価証券保有高
1838年8月21日	9,723,000	22,634,000
1839年8月27日	6,488,000	25,141,000
増減	▲3,235,000	Δ2,507,000
	Securities, Public and Private	割引額 (Discount)
1838年8月21日	19,566,000	3,068,000
1839年8月27日	17,569,000	7,572,000
増減	▲1,997,000	Δ4,504,000

* 増減欄のΔは増加を、▲は減少を、それぞれ表わす。(Morning Chronicle, 1840d, 3eの表による)

表3はそのことを示すために記事において掲げられた略表をその意義が明瞭になるように追加再現したものである。

この表により、地金保有高が減少しつつあるときに割引は増大し、地金保有高が増大しつつあるときに割引は減少していることがわかる。だからこそ、発券の自由に代えて、その通貨原理に基づいた規制が必要だ、というわけである。

記事は、このあとに、通貨原理に基づくイン格蘭

表3 1834～39年におけるイングランド銀行の地金保有高と割引額(単位ポンド)

	1834/2/4		1835/2/3		1836/2/2		1837/2/7		1838/2/5		1839/2/5		1839/10/15
地金保有高	9,723,000	↓	6,345,000	↑	7,610,000	↓	3,831,000	↑	10,032,000	↓	7,364,000	↓	2,466,000
割引額	1,902,000	↑	2,499,000	-	2,902,000	↑	11,425,000	↓	3,353,000	-	3,178,000	↑	8,311,000

* 矢印の↑は左側の時点から右側の時点にかけての増加を、↓は同じく減少を、それぞれ示す。増減の幅が小さい場合は-となっている。(Morning Chronicle, 1840d, 3eの下表より作成)

- (4) 表1とは別に、記事では、同時期の他の項目に属する有価証券高として‘Securities, Public and Private’の数値が掲げられており、同時期におけるその増減は6,422,000ポンドの減であった。この減少分を相殺してなお表の数値に見られる増加を示したことで、全体として金保有高の減少幅に見合うほどの有価証券保有高の増加があったことになる。また、これに加えて、‘Discount’の数値も掲げられていて、その同時期における増減は9,523,000ポンドの増であった。表の有価証券保有高の増加分2,960,000ポンドに上の‘Securities, Public and Private’の減少分6,422,000ポンドを加えると、その合計は9,382,000ポンドとなり、‘Discount’の増加分9,523,000ポンドにはほぼ一致することがわかる。

ド銀行の二部門への分割案を概要提示して、終わっている。

IV. 結論と展望

以上において概観した1840年における *Morning Chronicle* 紙の四つの記事がオーヴァストーンの手になるものであるかどうかは、わからない。しかし、それらが他ならぬオーヴァーストーンの立場から、1840年の委員会を総括し、それとともにその委員会においては尽くすことができなかつたオーヴァーストーンの主張の全体像を簡略ながら表わしたものであることは間違いないだろう。四つの記事は、その限りにおいて、1840年の未完に終わったオーヴァーストーン証言の補完だと言うことができるだろう。

その後、オーヴァーストーンは、1844年に *Thoughts on the Separation of the Departments in the Bank of England* (Overstone, 1844) を公刊したが、それは1840年委員会に先立つ1840年4月にすでに執筆済みで、関係者にも配布済みのものであった (Overstone, 1840d, 序文)。また、1857年には、同書を含むその著作等を集成した *Tracts and other Publications on Metallic and Paper Currency* (Overstone, 1857) が公刊されたが、その中には、1848年の二つの委員会での証言を除き、上記の四つの記事の後におけるものはなかった。その他には、主なものとして、1855年に 'Mercator' の筆名で *The Times* 紙に寄せた一連の書簡の集成である *Letters of Mercator on the Bank Charter Act of 1844 and the State of the Currency* (Overstone, 1855) が³、また1858年に、これも委員会における証言である *The Evidence given by Lord Overstone, before the Select Committee of the House of Commons of 1857, on Bank Acts, with Additions* (Overstone, 1858) が³、それぞれ公刊されたにとどまる。

これらの諸事情と上に概観した四つの記事の構成および内容とから、それらのどれ一つもオーヴァーストーン自身の手になるものとすることができないとしても、それらをオーヴァーストーンの通貨原理を、一応、一つにまとめたものと見なすことはできるだろう。実際、四つの記事はコラムの数にすると10以上の分量であり、それは通常の冊子のページで50ページ以上には達すると思われるものであった。ただ、しかしながら、

それらにはそのどれ一つにも 'Loyd' の署名は見られない。その意味で、四つの記事は、オーヴァーストーンの通貨主義を明らかにした中核的な文書とまでは言えないだろう。

その一方、四つの記事はその後半の二つにおいてヒュームとトゥックとの二人を主要な理論敵と定めて批判の対象としていた。このことは、通貨原理が誰の何に対立するものであるかを示すものであるが、ここでは両者はそれぞれ別に取りあげられ、批評されていた。それに対して、オーヴァーストーンはかつてトレレンズを批判する中で、ヒュームに与することは他ならぬトゥックを利することになるとしたのであった。ヒュームに与すること、すなわち預金を通貨を構成するものと見なすことは何故に、どのように、トゥックを利することになるのか。この点の解明は残されているのである。

文献一覧

- House of Commons (1840), *Report from the Select Committee appointed to inquire into the effects produced on the Circulation of the Country by the various Banking Establishments issuing Notes payable on demand.*
- House of Commons (1848), *Second Report from the Secret Committee on Commercial Distress; with the Minutes of Evidence.*
- House of Lords (1848a), *First Report from the Secret Committee on Commercial Distress; with the Minutes of Evidence.*
- House of Lords (1848b), *Report from the Secret Committee on Commercial Distress; with the Minutes of Evidence.*
- Morning Chronicle* (1840a), No. 22,093, 16th Sept. 1840, 2e-3a.
- Morning Chronicle* (1840b), No. 22,108, 3rd Oct. 1840, 3e-g.
- Morning Chronicle* (1840c), No. 22,123, 21st Oct. 1840, 3b-d.
- Morning Chronicle* (1840d), No. 22,140, 10th Nov. 1840, 3d-f.
- Gallatin, Albert (1831), *Considerations on the Currency & Banking System of the United States, Philadelphia.*
- (1841), *Suggestions on the Banks and Currency of the Several United States, in Reference Principally to the Suspension of Specie Payments, New York.*
- Hume, Joseph (1839), *On the Bank of England; and the State of the Currency.*
- O'Brien, D. P. (1970), *The Correspondence of Lord Overstone, 3 vols.*
- Overstone, Lord. (1837a), *Reflections suggested by a Perusal of Mr. J. Horsley Palmer's Pamphlet on the Causes and Consequences of the Pressure on the Money Market.*
- (1837b), *Further Reflections on the State of the Currency and the Action of the Bank of England.*

- (1840a) , *Remarks on the Management of the Circulation; and on the Condition and Conduct of the Bank of England and of the Country Issuers, during the year 1839.*
- (1840b) , *A Letter to J. B. Smith, Esq. President of the Manchester Chamber of Commerce.*
- (1840c) , *Effects of the Administration of the Bank of England. A Second Letter to J. B. Smith, Esq. President of the Manchester Chamber of Commerce.*
- (1840d) , *Thoughts on the Separation of the Departments in the Bank of England.*
- (1844) , *Thoughts on the Separation of the Departments in the Bank of England.*
- (1855) , *Letters of Mercator on the Bank Charter Act of 1844 and the State of the Currency.*
- (1857) , *Tracts and other Publications on Metallic and Paper Currency.*
- (1858) , *The Evidence given by Lord Overstone, before the Select Committee of the House of Commons of 1857, on Bank Acts, with Additions.*

竹内 洋 (2014), ヒュームの預金論とトゥック, 宮城教育大学紀要第48巻, 2014年1月.

—— (2016), ヒュームとオーヴァストーン——1840年の攻防——, 宮城教育大学紀要第50巻, 2016年1月.

(2017年9月29日脱稿)

(平成29年 9 月29日受理)